

第Ⅱ章 提言でめざす地域社会

1 めざす地域社会（だれもが独りにならない地域社会）とは

ここでは、めざす地域社会の具体的なイメージを述べてみたい。

たとえば、いじめられている子どもや、引きこもっている子ども・若者、子育てに悩んでいる保護者、一人で生活している高齢者、障がいがあるため社会参加に困難を感じている人、日本語がわからず生活に不自由さを感じている外国人など、身近に困っている人がいた時に見過ごさず、子どもならば子ども会、子育てに悩んでいる保護者ならば子育てサークル、高齢者ならば老人会など、地元で活動している地域の団体やグループなどが話を聞いたり、声をかけたり、行事に誘ったり、相談にのったりといった「おせっかい(*1)」がやかれている地域である。そして、その「おせっかい」をやくことが団体やグループに所属していない人々にも広がり、住民と困っている人との接点が少しずつ増えていく中で、孤立している人を無くそうとする人が増えていく地域社会である。

もちろん場合によっては専門的な知識が必要とされたり、繊細な対応が必要なこともあるので、地域住民はもちろんのこと地域の団体やグループなどだけでは対応がむずかしいこともある。そのような場合は例えば子ども家庭センターやボランティアセンター、市民活動センターなどの専門機関の対応が必要であり、地域住民にできる範囲はそのような機関を紹介する、機関に連絡するなどの対応であると考えている。

(*1) この提言で使う「おせっかい」とは「他人のことに必要以上に立ち入って、よけいな世話をすること」ではなく、周りにいる人の多様性を認めたくえで、気を配りながら、「誘う」「声をかける」などの行動を想定している。

2 めざす地域社会に近づくための具体的なイメージ

前項では、「めざす地域社会」が、地域の団体やグループなどで活動してい

る人が、困っている人に声をかけたり、行事に誘ったり、相談にのったりといった「おせっかい」をやることから始まり、多くの住民が困っている人の存在に気づき、行動を起こす人が増えていく地域であることについて説明した。

この項では、気づきから行動に移すにはどのようなステップが考えられるのかを述べてみたい。

ある一人の住民が困っている人の存在に気づいたとしても、一人だけで行動することはむずかしいのではなかろうか。やはり、仲間がいる方が行動を起こしやすいと考えられる。

ここで注目したいのがこれまで15年にわたってなされてきた学校・家庭・地域が連携した教育コミュニティづくりの取組みである。

子どもの課題に対処するため、学校を核として地域住民どうしや、PTA、子ども会、自治会などの地域の既存団体やグループなどが協働して取り組む中で培ってきた地域のつながりが府内各地に存在している。

子どもの課題が依然存在している現在にあって、学校・家庭・地域が協働した教育コミュニティづくりの取組みを継続していくことは不可欠であり、取組みを進める中で、地域の人々のつながりがさらに広がると考えられる。

子どもの課題以外の課題についても、そのつながりを土台にして、課題を抱え困っている人に対して、「誘う」「声をかける」といったことでいいから一緒に解決していこうとする仲間づくりができていけばと考えている。

しかし、仲間ができたからといって、すぐさま地域住民が困っている人に関わっていくようになるとは思えず、次の段階に進むにはいくつかのステップを踏んで行く必要があるのではないかと考えている。

まずは、困っている人がいることに気づくこと、次に何に困っているのか、どのように困っているのかを学ぶこと、そして、困っている人に対する行政や団体の取組み情報について知ること、ここまでのステップを経て、「何かやってみよう」とか「これなら自分でもできそう」という実践を始める段階になるのではないかと考えている。「何かやってみようと思う人」を地域社会に

増やしていくことは、社会教育の重要な役割である。

このように「気づく⇔学ぶ→知る→始める」というサイクルが繰り返されていけば、「何かやってみようと思う人」が始めることによって新たな課題に気づき、次の学びへとつながり、その解決に向けてできること気になることから活動を始める人が増え、だれもが独りにならない地域社会が徐々に形成されていくと考えられる。

ここで注意して欲しいことは、「活動を始める」の中に困っている人に対して関心を持っていなかった人が「関心を持つ」ようになることも含んでいることである。そして、そのことは極めて重要であると考えている。

なぜなら、関心層を増やすことが、そもそも孤立する原因となる「排除」や「忌避」をしない人を増やしていくことにつながるからである。

○地域住民の学びと実践が循環していくイメージ図

